

お  
年  
よ  
り  
作  
文  
集

第十  
八  
集

大阪・・八戸そして神津へ 石野田 絹子（七九歳） 一頁

貧乏はしたくない 宮川 富美子（七九歳） 二五頁

私の人生 石田 喜久雄（八三歳） 四一頁

神津の電話が開通した頃 松江 瞳 （八五歳） 六五頁

激動の昭和に生を受け

河合よし子（享年八三歳）八九頁

# 大阪・・八戸そして神津へ

昭和八年一月七日生 七十九歳

石野田 紗子（豊栄）

私の出身は大阪の吹田<sup>すいた</sup>で、六人兄弟の一番上の長女です。

神津島に来たのは二十七歳の時です。関西生まれの私が、関東の名前も知らない神津島に嫁に来るとは思いもしませんでした。

私は大阪生まれの大坂育ちで、家は代々八百屋をやっていました。八百屋といつてもお店に並べて売る小売ではなくて、あちこちの会社や食堂などにまとめて配達する卸し問屋の八百屋でした。

戦争時代は十代の終わりから二十代最初の頃でした、食糧難もひどい時代でしたが、家自体は八百屋の商売をしていたおかげで、三食

分はなんとか食べることができていました。

だんだんと戦争が激しくなり疎開も始まり、すぐ下の妹だけ集団でお寺の方に疎開していましたが、栄養失調が原因で眼を悪くしてしまいました。まだ兄弟姉妹もいるので、身近で親戚の居る所ということで、四国の宇和島に家族全員で強制疎開になりました。でも一年も経たないうちに終戦になってしまいました。

終戦後もすぐ大阪に帰ったわけではなく、一年ぐらいは四国の方に居ました。戦争も終わって世情もある程度静かになつて、生活するのにも自分で身を立てなくてはならないので、踊りが好きだったこともあり、親戚にも何人か踊りの関係の人があつたので“芸”で身を立てようと思つて日本舞踊も習い、四国にいる時に『藤間流』の名取も持つことができ、芸子の仕事につきました。

そんなある日、お客様の社長さんと私を含めた女性三人で、四国の宇和島から高知県へ抜けていく山道の途中、事故で車ごと落ちてしま

いました。私達女性三人と運転手は軽傷で無事に助かったのですが、お客様の社長さんはあろうことか亡くなつてしましました。

その事故に遭うまでは、何とか自分で小さなお店でも持ちたいと思って頑張つていましたが、その社長さんが地域では有名な人だつたので、亡くなつた人の手前もあつて、この土地でこのまま働いて、ましてや自分のお店を出すことなど出来ないと想い、気疲れしてしまい、もう嫌になつて、ここには居たくないと思い悩んでいました。すると当時青森県の八戸（はちのへ）にいた三つ違ひの妹から「義兄のやのすけさんが八戸でお店も何軒も持つてゐるし小料理屋もやつてゐるから、お姉さんの手も借りたいと云つてゐるし、こつちへ来て手伝つてみたらどうですか」と言つて誘つてくれました。

井本やのすけさんは奥さんは八戸の人でしたが、四国の宇和島から長男でありながら八戸に行き、そこで飲み屋街をつくるなど手広く成功した人で、そのやのすけさんの弟と私の妹が結婚して八戸に住んでいました。

その義弟のことですが、昭和四一年に貨物船の『稻荷丸』が利島沖で沈没して、全員が亡くなるという痛ましい事故がありました。その時の乗組員の一人が井本正さんで、私の妹の旦那さんでした。当時は八戸から神津に来ていて、稻荷丸に乗つて働いていましたが可哀想なことになつてしましました。

八戸のやのすけさんからも、二年辛抱してくれたら自分のお店を持たせてやる、ということだつたので思い切つて行くことにしました。

八戸は遠洋漁業の基地になつていて、とても盛んな時代でした。毎日、何百人という人達が出船入船で、船が出る時には近くの御料理屋さん等で身内等も入つて宴会を開いていました。十人以上になると“宴会”ということになつていて、私の仕事というのは、宴会場に出向いて、踊り、三味線等の芸を披露したり、お客様達の接待をするわけです。遠洋漁業専門に出入りする船の総元締めから、

出船送り出しの大きな宴会を任せられていきました。

藤間流の名を持つていたので、それこそ看板の有るのと無いのとでは、時間制で半値以下もの差があり、持っていたおかげで御祝儀も良くて、そこでは当時二万円いただけていました。

一日に二場所宴会場を持てば、それでもう充分の収入でした。ですから別にお店の方のお金を当てにしなくても私は充分それで良かつたんです。宴会場のお客さんを、その後小料理屋の方へ送り込めばよくて、もう御祝儀もいただいているので、そこに出る出ないというのは私の自由でした。

うちのお父さん（夫）と知り合ったきっかけは、お父さんがその頃、神津島のかなり大きな『栄助丸』に機関士として乗つていて、遠洋に出て八戸にも来ていました。遠洋漁業の基地なので、八戸に寄つて、そこから北海道等の漁場に出て操業し、また八戸に戻つて来てしばらく滞在するので、小料理屋のお店の方にもよく来ていた

らしいのです。でも私は遠洋の大きな宴会場の方が専門で、忙しくてそんなことは何も知りませんでした。

ある日お店の方から、まだお客様が二、三人残つていて、お姉さんの顔を見てみたい、会いたいと言つているとのことで「お姉さん三十分でいいから出てくれない」と言われました。「今日は私も精一杯外で働いてきたんだから、もう行きたくないですよ」と言うと、「前から頼まれていて、何度もダメで申し訳なくて、着替えて普通のままでもいいから顔出しだけして」というのでお店のお座敷に出ることになりました。



八戸にいたころ

そのお座敷で初めてうちのお父さんと顔を合せました。縁というの  
は不思議なものだと思ひます。

お父さんはあのとおりの寡黙<sup>かもく</sup>で、必要なことしかしゃべらないよう  
な人でした。でも酒の方は強くて、結構飲んでいました。

それから何回か見えましたが、当時の栄助丸のお父さんが面白い人  
で、「姉さん姉さん、こいつけまだ独身だで、三男だから家督<sup>かとく</sup>も継  
がないし、生家はこいつが居なくともいいだよ、婿に欲しいという  
話しがいくらでもあるだけんでも行かないだあ、姉さん大丈夫だで  
え、こいつと暮らしたらどうだ」と言つて、私に話してきました。  
私も独身で一度も嫁に行つたことはなかつたし、嫁に行くんだつた  
ら、ちゃんとした生活をしたいと思つていたので、独身だというの  
を聞いて惹<sup>ひ</sup>かれました。

あの時代、水商売をしていた女性には、特に独身というのは魅力的  
に感じられたものでした。本人は無口で、背もすらつとしているし、

栄助丸のお父さんの言うことは本当かなあとも思いましたが、なに  
せあまりものを言わない人なので・・・。

でも若い時分に板前になりたくて料理の勉強をしたことがあると聞  
いたので、八戸の店の向こうを張つて、私がこの人と一緒になつて  
ここでお店でも持つてやろうかなとも思いました。

お父さんとの結婚話が早く進んで行つたのには、私がお店勤めをや  
めたいと思つていたこともありました。八戸に来た時、私は自分の  
持ち物、着物等の身を飾るだけの物は、ちゃんと持つて来ていたの  
で、他の仲居さんのようにお店が貸し出す着物を着て働くかなくても  
いいというのもあって、四分六分で、お店の売り上げの六分が私の  
取り分ということだったんですが、実際は違つていて、他にもい  
ろいろと条件が違つてきました。それと腹が立つたのが、やの  
すけさんの妻でこの小料理屋の女将<sup>おかみ</sup>さんとのことでした。

この夫婦には子供が無くて、やのすけさんには妾に産ませた男の子

が一人いて、その子を家に入れて育てていましたが、その子の学校の送り迎えから食事の世話等をまかされていたのは、後に神津島に嫁に来た増恵丸の清水つせさんでした。

その子の事はつせさんにまかせていましたが、この女将さんは店の奥でじつとしているような人ではなくて、割ぽう着を着て料理の運びをしたり、皆と一緒になつて働くような人でした。

ある日、お客様が私に向かって「姉さんはやのすけの妾なんだつてなあ」と言つてきました。「なんてことを言うんですか!」と怒ると、聞いていた女将さんの方は、お客様に向かって、なんと、「そうなんですよ、だからわざわざ四国の田舎から呼んだんですよ」とか「うちのおとうさんの妾ですよ」と平氣で言つていました。

親族にも当たる私を、大事な自分の亭主の妾だ、それに育てている子供もまるで私の子供のように言い、子供も一緒に呼んで面倒みている、というような感じで平氣でお客様に嘘を云うことに腹が立つて

しまい、女将さんにつめ寄ると「そんなに怒ることはないじやない、良いお客様にはねえ、長く来てもらわなければならぬんだよ」と言われました。

このお店はそういう商売の仕方をして、八戸というところはそういう気風のところなんだと思つたら嫌になつてしまい、そんなこんなで、お父さんとのことも先を急ぐ形になつてしましました。

昭和三十七年の四月、本当に独身かどうか籍を確かめに行くようなつもりで、お父さんに付いて初めて神津島にきました。私が来た時に自転車で浜へ迎えに来てくれたのが、すみれ丸の子供のよしぇちゃん一人で身内は誰も来ませんでした。

よしぇちゃんは親から「あの芳一がなあ、八戸だか何処だかの芸者あがりを連れて来るつづうしかい、お前が迎えに行つてこおー」と云われたと後で言つていました。そんなわけで、お父さんの身内にはあまり歓迎されない嫁でした。

最初に連れていかれて「ここで泊れやあ」と言われたのが、浜から大家の前の道を上がる途中にあつた、ただ木を打ちつけて窓が付いていると いうよう なあばら 家でし た。そこ から少し 歩いて上 がれば親 兄弟の住 んでいる 家がある のに、そ



神津に来てすぐのころ、正月

こへ連れて行こうとはしないで、身内がみんな私を敬遠しているようでした。

これも後で聞いた話ですが、婿に行く先が二軒ほど候補としてあつたそうで、器量や身仕舞は良くても神津で住めるわけはないと、親として兄弟として一番にそれを考えていました。

当時は東京からの船便というのはなくて、高砂丸が下田から週に二便しかありませんでした。それも欠航が続いたりすると一週間も十日も足止めをくうような時代でした。私も四月なのに欠航続きで、いつそ帰りたかったのに帰れなくなってしまいました。

なんだかんだでそのまま嫁に入つてしまつたというかたちでしたが、もう八戸時代とは生活が全然違つて、戸惑うことばかりでした。

最初に住んだ家は、その頃は大家の前の道から降りる階段の先はすぐ砂浜だったので、朝起きると浜の砂ぼこりがすごかつたです。たいがいどこの家も水道は外に一個所あるだけで、お風呂も外でし

た。結局此処には何ヵ月も居れませんでした。

その時の繁沢のおばあちゃんがお父さんと従姉いとこで、大変さをみかねて「可哀そうになあ、姉さんそれじやあ、おいが知つた所を探してみるから」と言つて『伊助の隠居』を探して頼んでくれました。三畳で、押入があつて土間があつてという感じでした。

大堂で買つてきた石油ストーブでご飯を鍋で炊いて、それを空けて今度はおかずの煮炊きをしていました。

神津に来た当時は収入もなく食えなくて、大阪の実家の八百屋に夫婦してバイトに行つたりもしていました。お父さんは車の運転ができたので、野菜の配達にはもつてこいで、給料は二万円くらい貰つしていました。

そして伊助の隠居でまだ一年も経たないくらいの内に今度は基寿司の裏にある『左衛門』の隠居が空いたということでそちらへ引っ越しました。そこは十畳程あつてけつこう住みやすかつたです。



大阪にて・左二人が妹夫婦

何年か住んでいましたが、今の場所に来ることになつたのは、以前ここは歯医者だつたのですが、繁沢のおばあちゃんが「歯医者さんのお家が空くよ」と、また教えてくれて今の場所に引越しすることになりました。

神津島も段々に景気が良くなつてきて、お父さんが自分で渡船の商売を始めることにしました。

最初に造った『豊栄丸』はまだ五トン未満の船で、ずっと磯釣りを専門にしていました。

今の場所に越してきた時分には、当時のマルメ（政次）の中村節男おじいさん、みやおばあさんが、その時分から伊勢海老専門の仲買人で、買った伊勢海老は全部箱に入れて港の中で流して置いてありましたが、注文が来るとそれをうちのお父さんが船で熱海だとか下田に運んでいました。

マルメのおじいちゃんはすごくうちの人を買ってくれていて、その時分の釣りのお客さんは、たまに来ても一人か二人で、船賃は一千円か千二百円くらいだつたと思います。

二十年前みたいに、チャーターでいくらとか一人いくらという時代ではなくて、一人分千円程で油代にもなりませんでした。

当時は石鯛釣りがメインの時代で、餌は伊勢海老しか使いませんでした。そうすると伊勢海老が千七百円で、お客様の宿泊が橋本屋

旅館さんで、船代を入れて五千円かからない時代でした。その中でも一番安いのが船代でした。

マルメのおじいちゃんが「辛抱せーよ、これが辛抱のしどころだよ」「豊栄はこれで男になるぞ！」という時代が来るんだから、もう後何年とは云わないよ」とよく私ら夫婦に言つてくれました。

マルメの亡くなつたおじいちゃんおばあちゃん、繁沢のおばあちゃん達はこんなにうちの人の為になつて下さつて、本当に私達夫婦は感謝しています。

内地から嫁に来た私と増恵丸のつせさんには神津での生活や仕事に慣れるのも大変でした。

当時の神津の風習でさぐといつて、女の人が物を頭に乗せて運ぶのですが、前浜に『オオブト倉庫』があり、天草等を丸い大きな籠に入れて頭に乗せて運ぶという仕事があり、その仕事をしようと思い、ビール瓶や一升瓶を縦にしたり横にしたりして、ずいぶん練習しま

した。でもつせさんは出来るようになつたのですが、私はどうしてもうまくできませんでした。

それでも『あづま』の小母さんがその頃漁協に勤めていて、そこで帳簿付けをしていて「頭にさげーなくとも大丈夫だよ」と言つて、乾かした天草等を竹の棒で丸めて束ねていく仕事をさせてくれました。たしか一日働いて百円か百三十円だつたと思います。仕事が終わると「明日も出れるかやー」と云つて誘つてくれました。

またこんなこともありました。その時代の話ですが、今のあづまの角の道は、当時二人並んで道いつけばいぐらいの細い道でした。

まだ寿司屋も飲み屋もない時で、あづまの家の側にそこを通つて浜に行く人、帰る人が寄り集まる小さな窓のある三畳くらいの小屋があり、浜に降りて行つて、今日はダメだ（沖に出れない）となると、そこに寄つて夕方まで、いつも四、五人が焼酎を飲んでいました。その横には空地があつて、天草を足で踏み固める場所になつていて、

焼酎を飲んでは、そこで天草を踏んでいるおばさん達をひやかしたりしていました。

そんなある日、うちの船を時々手伝つてくれる人が走つてきて、「姉さん、姉さん、そこで姉さんのこと悪く言つているで」と教えてくれました。以前から私のことで変な噂が立ち、嫌な思いをしていたので、犯人がわかつたと思い、話を付けに意気込んで行きました。ただその前に相手の奥さんに断つておこうと思つて電話すると、「ごめんね、姉さん申し訳ないね」と言つていました。奥さんの承諾を得たので急いでいつて、窓から確かめたら本当に居たので、怒つて怒鳴り込み、相手を足蹴にして溜飲を下げました。

後でお父さんから「女が男を足蹴にするなんてことは無い、めずらしいことをすんなよ」と怒られてしましました。またこれで村中の評判になつてしまつたと思いますが、私もしたくてした訳ではありません。でも、どつちがめずらしい事なのか・・・私にはこういう事はどうて

い堪忍することはできませんでした。私は良く言えば正義感が強い、悪く言えば短気なのでしょうか。

いろんな事がありましたが、神津に来てから一番良かつた時といえば、昭和四十五年からで、やはり離島ブームの時代でしょうか、とにかく人に負けたくない人で一生懸命がんばりました。

下田にマンションを借りてそこに住んで、家には週に二日ぐらいしか居ませんでした。

下田航海をして今は七千円ですが、あの当時は下田から一人乗せて来るのに四千円、船代と伊勢海老を使つても一万円程で、また海はいくらでも魚が釣れる良い時代でした。

今この家は、歯医者さんが居た頃の家を木造の三階建てにして、2年程してから、部屋が四部屋しかないので、それじやあお客様を入れて船宿をするのにつまらないということで鉄筋に作り変えたのが昭和四十年を過ぎた頃でした。

たしか宿代が一泊二食付きで二千円だつたと思います。それでもお金自体に値打ちがあつた時代でした。時代が時代だったので信用組合も使え使えとお金を貸してくれて、そして毎日、日掛けの集金にも歩いていました。毎日集金に来てもらつても、払えるだけの稼ぎがある、時代も羽振りの良い、そんなご時勢でした。

私の母もまた神津をうんと好きな人で、八百屋を引退してからは、一年に2カ月くらい遊びに来ていて、幸十郎のおばあちゃんと大の



二隻目の豊栄丸にて

仲良しになつていきました。

また、もともとがそんな商売をしていたので、うちの手伝いで十キロのコマセの箱を指で二つ片手で持ち、両手で四十キロのコマセを車から降ろして冷蔵庫に入れる、冷蔵庫から出して車に積むというふうに、へたな男の人の三倍くらい働くような人でした。

そしていよいよ帰る時は、幸十のおばあちゃんが自分も東京へ行くので一緒に連れて行つてくれて、東京まで迎えに来ている他の子供に連れられて大阪まで帰る、という感じでした。

本当に神津が大好きな人で、八百屋を辞めた時も、わずかな財産を兄弟であってもしない、こーでもないするので嫌になつて、うちのお父さんに電話して「神津のお父さん、私を引き取つて」と言つてきました。」「引き取れつて、おばあちゃんどうしたんだ?」と言つと、「もうね、女の子四人いても、連れ添うている亭主は皆他人です。だけど神津のお父さん程良い人はいないから、どうせ年取つ

て住むんだつたら神津が好きだから、神津に行きたいから私を引き取つてくれませんか」との電話だつたそうです。兄弟姉妹との関係も気になり、大阪から荷物運ぶのに当時は五十万円以上もかかりましたが、神津に迎えることになりました。

それまでして好きな神津に来たのに、まだ半年も経たないうちに、さつま芋を食べていて脳梗塞をおこして倒れてしまい、広尾病院へ緊急へりで行きましたが、助かりませんでした。

あまりしやべる人ではなくて、いいおばちゃんだったと周りの人からも言われましたが、当人も最後亡くなるなら神津でと思つていたのかも知れません。増恵丸のつせさんも私も、時々、何でこんなところまで嫁に来たのかな、と思つたりもしました。神津で住むのいろいろながつて、けつこう辛抱しました。でも、辛抱というより意地だつたのかも知れません。

民宿の方も身体を二回程壊しましたが、十七年続けました。うち

の人は一年おきに船を造り変えるような人で、最初に持つた船が中古で、最後の船は借金の返済分にと手放してしました。

一昨年の四月に嫁に出したそ  
の船をいれて、全部で5杯造  
りました。

今、お父さんはシルバー人材  
センターで仕事に通つていま  
す。

良い時もあり、悪い時もあり、  
苦労があつて今幸せがあるわ  
けだと思いますが、これから



親戚の結婚式にて

先はどうなつていくんでしょうかね？  
私の人生もいろいろあつたけど、回りの人達にも助けられここまで  
来ました。でも、一番は良い亭主に当たつたんだと思います・・・  
今はね。（笑い）

平成二十三年十一月

（以上聞き書き）

# 貧乏はしたくない

昭和七年四月二十五日生 七十九歳

宮川富美子

私の実家は『忠エ門』で、七人兄弟の上から四番目に生まれました。昔は皆、貧乏で食べる物といえば『イモ』とか『ハゴ』とかで、戦時中はブドウの葉っぱとか、根っこも掘つて食べたりしました。イモから作るハゴも、神津の女人で作れる人は、今はあまりいなくなつてしましました。着る物も本当にろくな物は無いし、学校に履いていく履物はきものも、靴の時代ではなくて、男も女もみんな藁草履わらぞうりを履いて行き、ランドセルやカバンなどもなく、風呂敷を背負つて登校したものでした。ですから子供のころからずっと、貧乏は嫌だ、自

分が親になつても貧乏はしたくない、自分の子供ができても貧乏はさせないよう頑張ろう！という気構えで暮らしてきました。



伝エの妹と

小学校時代の同級生は男女で六十数名いました。三年生か四年生の頃だつたと思いますが、まだ戦時中で神津にも空襲の被害がありました。爆撃の飛行機が来るとサイレンが鳴つて、校舎にいた生徒達は皆、小学校の裏の山に整列して逃げ上りました。今思うと、なにもアリンドウあり（蟻）みたいに列を作つて逃げなくともいいのにと思いますが、その時分はそんな感じで、ちゃんと整列してから逃げていました。男の子達は山の上にあがつて「一番いいや、こうしているが、一番

いいや」と言いながら、のん気に木の下でしゃがんでいました。

朝礼の時は、昔の先生はとても厳しくて、竹刀や棒を持つていて、二列で列をつくつて並ばせて、行進させる時に動いたり背中をかいたりして少しでも列が乱れると「ここその後ろから、ちょっと待て！」と、止められて「お前達はダメだ！」と叱られるのが常でした。

ある日の朝礼の時、稻葉ゆたかさんが列から離れて、ボロボロと涙を流して泣き始めました。一緒に並んでいた私とゆたかさんの二人は残され、てっきり怒られるのかと思つていました。そして当時いた中村先生が「何で稻葉、お前泣くんだよ」ときいたと同時に、すぐ気付いたみたいで「ああ、そうか、そういうえばお前の兄さんは今日入隊したんだつけなあ、ごめんよ、そんなの知らないで、いいよ、もう帰つてもいいよ」と言つてくれました。それをきいて泣けてきました。今朝、軍隊に入隊する兄さんを泣きながら見送りに行つてきて、まだ気持ちが癒えないまま学校に来たのでした。

戦時中だつたか戦後だつたか覚えていませんが、夜には山下彦一郎先生が『シントウ塾』という夜学を開催してくれていて、私も学校が好きだつたので通つていました。子供から大人までいて、『おきみや』の信子さんや『モーゲー(亀屋)』の姉さん達、私は小さい方で、『金エ』の睦<sup>むつみ</sup>兄など年上の兄いらがけつこう来ていました。

その塾がけつこうためになつて、夜学で憶えたことを後で学校で教えてもらう、ということがよくありました。なんで終わつてしまつたのか、解かりませんが、あの山下先生のシントウ塾はすごく良か



東京時代

つたです。

また、私がまだ学校に通っていた時分でしたが、学校の方で私を選んでくれたのか、土曜、日曜になると誰だか知らない人でしたが、その人が来て、私を大島支庁関係の事務所に連れて行つてくれました。当時は石山（神戸山）の採石も盛んな時期で、最初は長八（橋本屋）にあつた石山事務所で「清七」の姉さんと一緒に働いたりしました。その後、事務所は「松屋」の上の敷やぶの中にあつた小さな一軒家に移り、次に七軒町の方に引越しをしてそこで働いていました。

でも、当時の尋常小学校を卒業する十二～三歳の頃には、神津の同級生のほとんどが都会に憧れて「東京に行く！」「東京へ出る！」と言つっていました。東京や内地で働いている友達や先輩がたくさんいるので、あっちから「こーやー」、こっちから「こつちいこーやー」という手紙が来て、みんな都会に行きたくなるのです。そして、友達の善次の武子さんや六エの恵子さん達も行つていて、先導して

仕事も紹介してくれるので、こりやあオイも行かなきやあ！・・・というわけで、事務所を辞めて奉公に出ることにしました。

当時の「高砂丸」に乗つて行きました。最初の奉公先は、静岡の伊東にある「桶屋」で、桶や篩等を作る所でした。住込みの女中さんですが、御付け（味噌汁）の実（具）も、どんな大きさに切ればいいのか、ジヤガイモのむき方すらも知りませんでした。まだ小学校を出たばかりの十二歳ぐらいで、親元を離れて、他人の家に住んで働くということは、子供にとつては容易なこ



S38年 小学校建設時の工事仲間

とではありません、可哀そうなもんでした。本当に今の子供達は幸せだと思います。

その家には、私と年もそんなに変わらないぐらいの女の子がいました。朝、窓ふきの掃除をしていて、その子がきれいな着物を着て力バンを背負つて学校に行くのを見ると、憎つたらしい憎つたらしいで、『オラも家がちゃんとなつて一れば、貧乏でなければ、この女の子と同じように上の学校にも行かれるのに』と窓を拭きながらいつも見ていました。するとその様子を見ていたこの家のおじいちゃんが私に「お前も行きたいのか・・・。」と涙を流しながらやさしく言つてくれたのを今でも思い出します。

次に行つた奉公先は、鎌倉の藤沢という所にある建設会社で、まるでヤクザの親分の家という感じでした。その家にはまだ小さな子供がいて、主人夫婦がまだ寝ている早朝に起きて、御付けを沸かして、オシメを洗いました。寒い時期で、洗濯すると手は真っ赤になつて

しまい、干したオシメも、少しすると力チンカチンに凍るような所でした。

そして今度は東京の柔道の先生の家へ行くことになりました。

ここで憶えている事は、その柔道の先生から「化粧も何もしてこないで、鼻だか口だか分らないじやないか」と言われたことでした。すっぴんだつたからでしょうか？・・・それで化粧するようにしたのかどうかは憶えていません。

当時はまだ戦争中で、あちこちの家も焼け野原になつていてる状態でした。奉公の仕事は、本当に容易ではありませんでした。



民宿を始めた頃の大松

貧乏と戦争とで、利口な子供もいっぱいいただろうに、上の学校に

仕事は、本当に容易ではありませんでした。

も行けずに、生まれた時代と、生まれた場所なのか・・・運命?、宿命?とでもいうのでしょうか?、貧乏だけはしたくないとつくづく思いました・・・。

奉公が終わってからは神津に戻りました。忠エに居て、石山で働いていたりしていましたが、河原村に嫁に行つていた『ごりざ』の姉から「こっち村に姉妹がないしかし、『大松』に嫁に行っちゃ一れやあ、富美子」と言われ、二十二歳の頃、この家に嫁に來ました。

当時の大松はボロ家で、西風が吹くと雨戸や部屋の障子がガタガタと揺すれ、心張棒しんぱりぼうをしないとうるさくて夜は寝られない程でした。その当時の仕事は、女も男も工事に歩く人が多かつたです。今的小学校の建設工事や天上山の下の砂防ダムの工事にも歩きました。工事がなければ、監督の所へ仕事を頼みに行つたりして、本当に容易じやありませんでした。また海岸へ『藻もつく(打ち上げられた海草のかたまり)』を拾いに行つては、それを夜中まで『オオブト』とゴミに選り分けて、きれいにして売つていました。

大松には、おつな畑がなくて、『きぬさや』も三年程作りましたが、長くはできませんでした。学校の警備員をしていたお父さんの仕事が終わるので、『明日葉』の栽培をしようと、一生懸命になつて荒あらこをおこして畑にしました。お父さんが亡くなるまで明日葉を作つて出荷していましたが、私一人ではできないので今はまた荒地に戻り、竹山になっています。

昭和四十年代の中頃には、『養蚕業』をやる人が出てきて、私も





五利左の姉と

家の前に小屋を作つて、『蚕』が食べる桑の葉を山から取つて来て、蚕を育てて、さなぎの『繭玉』を作つていました。これも三年ぐらいやつたでしようか、あまり稼ぎにもならず、だんだん下火になつて終わつてしまい、神津で養蚕する人はいなくなりました。

また私は右の眼の視力がほとんどありません。次女の好美がまだ保育園児だった頃、役場から買った杉山の山払いをしていた時、運悪く鎌が石に当たつてしまい、石の破片が目に入つて傷つけてしました。内地の病院に行って入院しましたが、どうどう視力が回復すること

はありませんでした。

入院している間、家ではお父さんが、保育園に持つて行く弁当を持たせていましたが、保育園の新聞だったか通知だかを後で見てみたら、『好美さんのお弁当にはおかげで香々こうこ（たくあん）が入つていただけでした』と書かれしていました。

この好美は、私が退院して神津に帰つて来る日に「今日は、母ちゃんが帰つてくるだ」と保育園をずる休みして友達と二人で「ずる休みだしかし、見つかっちゃあだめだしかし」といつて忍者のように隠れ隠れしながら港に迎えに行つたと云つていました。

まだ若いのに片方の眼が見えなくなつてしまつて、他の人がしないサンガラスを掛け、不自由な中、それでもずっと今までがんばつてやつてきました。

色々大変な思いをして、『だしかし、みんな貧乏のせいだあじえん！』と思つていました。昔の事で皆がそうでした。『だしかし、

貧乏は、はいしたかーないや、子供ができるも、あが（自分が）食わなくとも、子供ーば学校にやんないきやあ（通わせなきやあ）』と思つてがんばつて暮らしてきました。

「このことだけーば、子供らに言つ  
といていーろうか。」ハツ、ハツ、  
ハツ。（笑い）

それでも、昭和四十年代の始めの頃には、神津もパラパラと観光のお客さんが見えるようになりました。大きな家で旅館をやつている所はありましたが、民宿はまだそんなにく、数軒程度でした。でも、時々家でお客を泊めることがありました。というのは、宿を取らないで来た客

が、民宿の看板を出しているわけでもないのに「今日、泊めてくれますか」と言つて来るからです。浜から近い家だつたせいか知りませんが、仕方ないので「にしらあ、しようがない、そこへ上がつてえれやー」と言つて待たせておいて、急いで部屋を片付けて泊まらせていました。そんなのが始まりです。

そんなある日『勝五』のじいさんが「富美子、お金のいい稼ぎがあるで」と言つてきました。「あにがやあ？」と聞くと、「民宿つつう商売がな、すごくお金が稼がれて、工事なんかより、よつぽど良いしかいな、早くやれよ、民宿をやれよ！」と言つてくれました。その後『離島ブーム』などもあり、お客様も大勢神津に来るようになつて、昔は夏場だけの営業でしたが、おかげ様で民宿は繁盛させてもらいました。長女の志津香しづかが結婚してからは、釣り船と釣宿もやつています。民宿をやつていた時代が一番良かつたと思います。子供の頃からの「貧乏はしたくない！」との思いも、民宿の稼ぎの

平成23年 2月 第と



おかげで、貧乏を切ることができました。民宿をはじめた頃から、学生仲間と何度も泊りに来てくれて、神津を楽しんで帰つて行つた人達の中には、いまだに年賀状をくれる人もいます。

私自身も旅行が好きで、友達の『松屋』の松江鶴子さん達と行つたり、お父さんの友人に旅行好きな人がいて、夫婦で一緒に合同して、あちこちよく旅行しました。

旅行以外は、趣味という趣味を持つ余裕も無かつたのですが、ネコが好きで、今まで飼つたのは三匹になります。三匹とも名前は『みい』と呼んでいました。ネコが一番かわいいです。

また、『千歳屋』の清水晴子さんがお店を始める前は近所に住んでいて、『編み機』を使った編み物をしていました。友達だつたので私も教えてもらい、編み機を買い、『おおだり（縁側）』に置いて、セーターを編んで子供達に着せたり、知り合いにあげたりしていました。今はもう編み機はありませんが、亡くなつた晴子さんとともに

に懐かしく思い出します。

自分の父も母も早死にで、娘達にも「おいも早死にだしかいな」とか言つていましたが、こんな長生きしています。

二人の娘も、長女は自分の努力で大学まで出ることができ、次女は『やすらぎの里』に勤めているので、今後も安心して暮らせると思います。

（笑い）

孫にも囲まれて幸せに暮らしています。

平成二十三年十月

（以上聞き書き）



甥の結婚式

# 私の人生

昭和四年四月二十一日生 八三歳

石田 喜久 雄（丸一建材）

私は作和の次男で、兄と姉二人の四人兄姉の末っ子として育ちました。三年前に作和の兄が亡くなり、その前についじの姉が亡くなっているので、兄姉も今は文治の姉と二人になってしましました。母親は五郎造の出で、どちらかというと長生きの系統で、私が元気で働いていられるのは母親に似たのだと思います。

尋常高等小学校を卒業しましたが、当時は戦争も始まつたりして東京には出づに、家の手伝いをしたり、その頃、大里沢が水出がして崩れて、その崩れの林業砂防工事の石積みの仕事に出て、少し稼いだりもしました。この仕事で石積みの仕方を覚えました。

昭和十九年に海軍予科練に志願しました。十六才になつたからなかなかの最年少で、神津で兵隊になつた最後の人間です。もう少し早く出れば戦地へ行つて死んでいたかもしません。

その当時、甚吉の父が兵事係で、大島で一次試験があるので、甚吉の父に連れられて同級生や一つ下の仲間と受けに行きました。

一次試験に合格して、今度は二次試験が三重県の航空隊で行われるので、三重県まで行くことになりました。

その時たまたま地震があつて東海道線が不通になり、中央線を乗り継いで行くのですが、塩尻の駅で同行した内の一人が迷子になり、探したりしながらやつと三重県の津市に着き、三日間の試験を受けました。何とか全員合格して帰つて来ました。

昭和二十年五月に私が一番先に入隊することになりました。

今度も甚吉の父が連れて行ってくれるものと思つていたら、その頃村会議員をしていた源五エ門の父と清次の祖父が東京都庁へ出掛け

るので一緒に連れて行つてくれることになり、そのまま都庁までついて行きました。

この時、神津では疎開の話しが出ていて、清次のじいさん等は都庁の人と神津の疎開先の話し合いの用でした。<sup>そかい</sup>

東京都の人とじいさん達の会話が後ろの方で待つてある間、聞こえてきて、疎開先の候補に山形県と奥多摩と後一ヵ所どこかの話をしていました。

この時、新島からもだれかきて疎開の説明を受けていました。お昼に都庁でカレーライスをご馳走<sup>ちそう</sup>になり、とても旨<sup>うま</sup>かつたです。この入隊の時には一緒の船で新島から宮川国広君と大島から野口勇君の島からは三名でした。それぞれ別の隊に入つて私は丹波市（今は天理市）に着きました。そこはもともと天理教の宿坊<sup>しゆくぼう</sup>で全国から天理教の信者がお参りに来たときに泊まる所で、広い敷地に何棟もある所を海軍が徵収して使つていました。

海軍航空隊なのに場所は奈良県でろくな飛行場もなく、すでに飛行機もろくになく、飛行機を操縦する訓練もできませんでした。

この時立派な飛行場や飛行機があつたら、戦地に行くか特攻隊になつて死んでいたと思います。

隊にいる間に大雨が降つて、災害になつてしまい、兵隊訓練と言うより災害復旧工事に当たつていたようなものです。

しばらくして終戦になり隊は解散して東京へ戻つきました。



海軍一等飛行兵進 記念

都庁での話が疎開先は山形でということだったのと、兵隊に

行つて いる間、みんな山形に疎開して いると思 い込ん でいましたが、奥多摩に居ると聞 いて驚 きました。

結局、山形は受入可能な人数が多かつたので、新島と式根が疎開することになつたようです。

神津の人達はまだ疎開先にいると聞 いて、伊東で待つていれば余計な苦労もしなかつたのに、事情が解らないままでりあえず家族の所へ行こうと思 い、汽車で拝島まで行き、どうにかこうにか五日市に着きました。そこから数馬まではだいぶ先で、今日中に行くのは無理だと思 い、泊めてくれる所を探して いたら、たまたま聞いた家で「あの人 がそつちへ今から行くから一緒に付いて行きなさい」と言われ、泊まらずにその日のうちに数馬へ着くことができました。

数馬での九区の疎開先は大変な所でした。作和は文治の家族と一緒に家の家に居ました。道下の小さな草葺くさぶきの一軒家でしたが、清次の家族は道の上をいくらか上がつた方にいました。下駄屋らはその更に奥

をずーと行つてまた道を上がつて行く、牛小屋の隣の牛が顔を出すような所にいました。

しばらくして疲れが出たのか数馬で熱が出て頭が痛くなつてしまい、動けなくて二日程寝込んでしまいました。

疎開先から配給を本宿までもらいに行くのですが、バス道より山越をして行くと近いので山を越えて行きました。幾日か後に小河内たかはしだか御嶽なつかだかの方にいた久助の喬たかしが山越をして来て、偶然に行き会い懐かしかつたです。

終戦後も西多摩に幾日居たのか、やつと神津へ帰れることになり、伊東まで戻るので、数馬からみんなでぞろぞろと歩いて来るのですが、歩ける人は歩いて、歩けない人はリヤカーに乗せてひっぱつて、しょぼいて、やつと五日市の駅まで来ました。

九区は疎開の時、食料や何やらを樽たるに詰めたりして伊東まで運搬船で運び、そこから人間は汽車で奥多摩へ行きましたが、どういう手

違いか荷物は届かず、そのまま伊東の市場にありました。

神津へ帰る運搬船が来て出るまで、その荷物が盗まれないよう若い者が寝ずの番を交替でしました。他の区では帰りの荷物が盗まれたりしたそうです。

疎開先では食料が届かず苦労しましたが、伊東にあつた食料を持ち帰れたので当座食べる物があり助かりました。

畠もそのままで疎開に出たので、神津では食べる物が無くて、すぐ百姓をしないとで、物が取れるまでアシタバやら山芋を掘つたり、藤の根っこを掘り出し、葛くずをこさえてしのぎました。この時は本当の食糧難で猫も杓子しゃくしもあらゆる所を耕して百姓をしたものでした。終戦からしばらくはそうして食べるだけで精一杯でした。

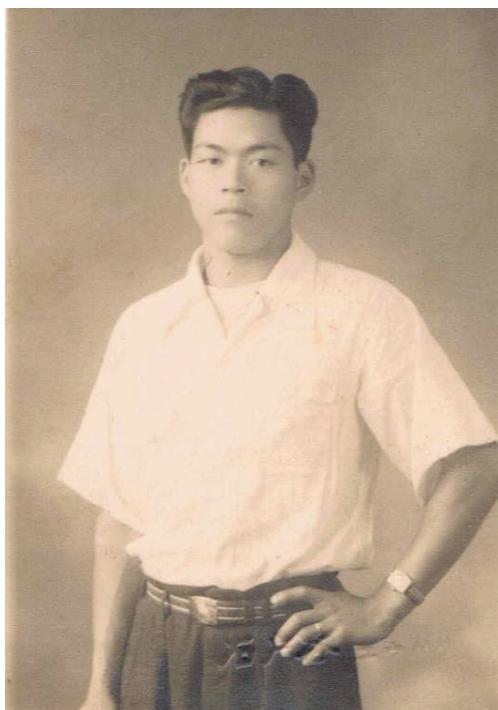
暮らしあり落ち着いてきて、文治の桶屋おけやを手伝うようになりました。それがと言うのも、ゆう子姉が下駄屋の喜曾子姉の従兄妹いとこの兄と結婚して、その義兄が桶屋をしていて、仲むつまじく暮らしていたの

に、あろうことか、早くに亡くなつてしましました。当時、下駄屋の隠居が今の車庫の辺りにあり、そこで姉家族は暮らしていましたが、桶屋の道具もまだいくつか残つていました。

作りかけの小柄杓こびしゃくがそのまま置いてあり、作和のすぐそばなので、行き帰りに隠居の前を通る

度にその小柄杓の作りかけを見て、可哀想でもごつたくて、文治へ持つて行つて、あつた道具で続きをつたら上手くできました。それを見て文治のじいさんが桶屋の手伝いをするように言いました。

文治のじいさんは気が向かないと働かない所があつたので、頼まれて作つていな桶や柄杓ひじやくがたくさんありました。



二十才のころ

仕事は山に積まつていて、見よう見まねで文治の仕事場に入つて桶屋を始めました。

文治の義兄は終戦になつても日本へ帰つて来られなくて大変でした。それから二年位して文治の兄が帰つて来て、二世帯で住むには狭いので、文治の家を建て直すことになりました。

この時は戦争で空襲にあつて焼けた河原方面の家も建て替えるので、建築ブームのようになつていきました。

材木の寄木を拾い歩いたり、山の木を切つて挽いて、どこの家もそ  
うやつて材料を集めて貯めて家を建てました。

材料の目途が立ち、家を建て替えるために桶屋の仕事場も取り壊し  
てしまつたので、桶屋の仕事ができなくなりました。  
文治を建てる時の大工の統領が半エの父で栄助の父とやつていて、  
その弟子に山田の森利もりとしがいました。

半エの父が「喜久、にしも仕事が出来ないもんが大工の手間をしれ」

と言つて、森利の相棒にしたくて何度も誘われました。それで、大工の手間をすることにしました。これが大工の始まりです。

大工と桶屋では、桶屋は自分一人で自分の家で出来ますが、当時の大工は施工主に使われる身ではあります、座つてこつこつやる桶屋より、立ち回つてやる大工の方が仕事のし甲斐があつて、文治を一軒建てて、それから養ようのじさんのじさんの弟子になりました。

そうこうしてまだ半人前にもならないような時でしたが、金五の喜代松おじさんにぎに誘われて北海道の夕張へ行くことになりました。

夕張は炭鉱景氣で賑にぎつていきました。石炭の最盛期でした。

夕張炭鉱は、外国人が夕張の沢を登つていて、山の斜面に石炭が露  
出しているのを偶然見付け、それを北海道汽船という会社が始めた  
のだそうです。

喜代松おじさんはその前の年に兄弟の金五のおじさんが夕張で寿司屋をやつていて、その寿司屋の店を新築するので夕張まで家を建て

に行き、炭鉱の住宅を建てるのに大工が足りないのを見つて知つていました。

寿司屋のおじさんの計らいで、山田の森利を相棒に、喜代松おじさんが夕張の

炭住を建てに行くことになり、弟子の与七の滝一たきいちも連れて行くことになりました。まだ一人くらい連れて行けるというので、私に声が掛かりました。私はまだ半人前のようなもので、ろくな道具もないのに、度胸どきょうが良くも、行くことにしました。

北海道への行きがけに東京で道具を買って、一昼夜あまり汽車に乗つて青森まで行き、連絡船に乗つて函館へ行き、夕張に着きました。五月に行って十月に帰る予定が十一月まで居ました。たしか昭和二十八年だったと思います。

夕張は寒い寒いで、風呂屋に行つて戻つて来るわずかな間に、濡れた手拭いがかちかちに凍つて棒のようになつたり、戸や窓には目張りもしてあるのに、朝になると家のなかで雪が積もつていました。北海道では請負師うけおいしのような人が居て、その人に「あれをやれ、これをやれ」と言われて仕事をするのですが、喜代松おじさんも森利も滝一だまも黙つたような人達だったので、何でもかんでも交渉事をやら



夕張にて 左上滝一、森利 左下私、喜代松、

され、人に割りまいを食わされるものかと、言うべきことはちやん  
としました。

秋田や新潟方面からも大勢の職人が来ていました。

炭住の五棟分位の材料が一山に積んであって、そこからてんでに自分の使う材料を持つて行くので、「やい、はいく材料を持つばあ、割まいを食つてしまーわ」と言つてそこからかつてに取出しました。夕張の真谷地という所で働いていたので、神津から真谷地当てに出した手紙が神津へ戻り、神津では本人に届かないのを知り、屋のおじさん気付けで出し、そこで初めて手紙が届かないのを知り、私が真谷地の郵便局長當てに怒つて文句の手紙を出したところ届くようになり、郵便局長が謝りに来ました。

大工仕事に關係ないそんな交渉事も多々ありました。

この年、神津は『ぼうけ漁』が大漁で、滝一の親元は漁師だったの  
で干物やらなにやら送つてきてくれました。

北海道で初めてブロックという物を見ました。石炭の燃した殻からで作つてありました。そのブロックで炭住の側面を作つて、内装と屋根を木でこしらえるようになつていきました。内地の大工はどうだか判りませんが、神津では大工が基礎のコンクリー仕事もしていたのでブロックもすぐ扱えました。

この時にも交渉事ですごいケンカをしました。役所が建てる住宅の図面をなかなかよこさないので仕事にかかれず、しようがないので人のやつてある基礎を見て同じに作りました。

昔は家の外に『しかい』といつて、神津でも昔の中学の校舎に取り付けてありましたが、外壁の羽目に付ける三角のつづかい棒のような物です。

住宅に二力所しかいを付けるのですが、出来上がつたら少し寸法が違つっていました。玄関や窓の邪魔になるわけではないのでそのままにしておいたら、現場監督が来て、ああだこうだと文句を言うので、

逆に「早く団面をよこさないからだ」と文句を言い返しました。

北海道と言う所は、本州のような杉や竹が生えていないのですが、金五の寿司屋のおじさんが杉の電信柱をどこからかもらつて来て、私にそれで寿司桶を作れと言い出しました。私が桶屋が出来ると知っていたのかどうなのか、しようがない、作るしかないので、わざわざ東京へ道具を注文して送つてもらいました。まつたく、北海道で桶を作るとは思いもしませんでした。

炭住もだいたい出来て、寒くならないうちに神津へ帰ろうとしていたら、真谷地で大火事があり、あらまし焼けてしまい、川に架かつていた吊り橋もワイヤが焼けて落ちてしまい、川のあつちとこつちで行き来も出来なくなり大変でした。それで新たな仕事が出来て、神津へ帰るのが遅くなり、結局十一月まで北海道に居ました。北海道から戻つてきて、また養之おじさんと大工をしました。

太七のじいさんが頭領で、養之おじさんと久兵エのおじさんと私と

で市平の家を建てました。今も残っています。また、兵エ門のじいさんとも久七や勝エの家を建てました。喜七を建てるときも親戚だつたので手伝いました。善五の家は芝居小屋になつていたのを芝居をやらなくなつたので、養之おじさんと大改修をしました。この頃には養之おじさんの「せがれ」猛夫も大工見習いで一緒に働いていました。

丁度その善五をやつている時、長浜祭の前の日だったのですが、長男が生まれて七夜の日で、七夜の「ご」馳走を作つたので、猛夫と養之おじさんも家に連れて、みんなで昼飯を食べていたら、庭に煙が充满



前列左父親、右二人目養之おじさん

してきて、干してある洗濯物も見えない程になつてしましました。何ごとかと思い外に出てみたら、農協が火事になつていました。

当時の農協は治工門の屋敷を借りて、そこで突き屋（精米、製粉等する所）をやつていましたが、その突き屋が大火事になつていて、大騒ぎをしました。

この頃にはコンクリートの大きい建物は建設会社が請け負つて造るようになりました。建設に頼まれて太郎工門の前にあつた信用組合や風早の下の農協を建てました。

この頃は民宿が盛んになり、古い家も民宿用にリホームしたりで、大工は皆忙しかつたです。

以前から神津に材木を降ろしていた町田にある『真田屋』という材木屋が神津に店を出すことになりました。

真田屋さんは釣りに来ていたお客さんで、神津の建築ブームを見て「これは、商売になる」と赤羽の峠の所を借りて店を出しました。真田屋は元々は相模原で製材を営んでいて、その次男が神津の店を任されていました。そこで富江（妻）が事務を頼まれて働くことになりました。

農協を建てた時のことですが、農協の仕事を頼まても私は忙しくてやつていられないで断つたのですが、清光丸の兄が何度も頼みに来るので根負けして基礎だけならということで手がけました。基礎ができたので、内地から型枠大工かたわくだいくを探してやつてもらうように言つたら、大工が見つからず、結局最後まで手がけました。



母、姑、姉達

その頃、長男が東京の高校を卒業するので、富江が仕事を休んで子供の引つ越しなどで東京へ行つている最中のことです。

真田屋さんが神津に来るので私が迎えに行つたら、船から青い顔をして降りてきました。「あんだ、船に酔つたあな」と聞いたら、「そうじやあないんだよ、石田さん、手が空いたら相談があるだよ」と言うので話を聞いたら、店が潰れてしまうということでした。

九州に買付け用の事務所があつて、九州の木材を購入して売つていましたが、九州の店は他人任せにしてあつたので、そこが借金を作つて、資金繰りが付かず高利貸しのような所から借りた金を返せず、本店の方に差し押さえが來たので、いずれこつちにも来るだらうということでした。

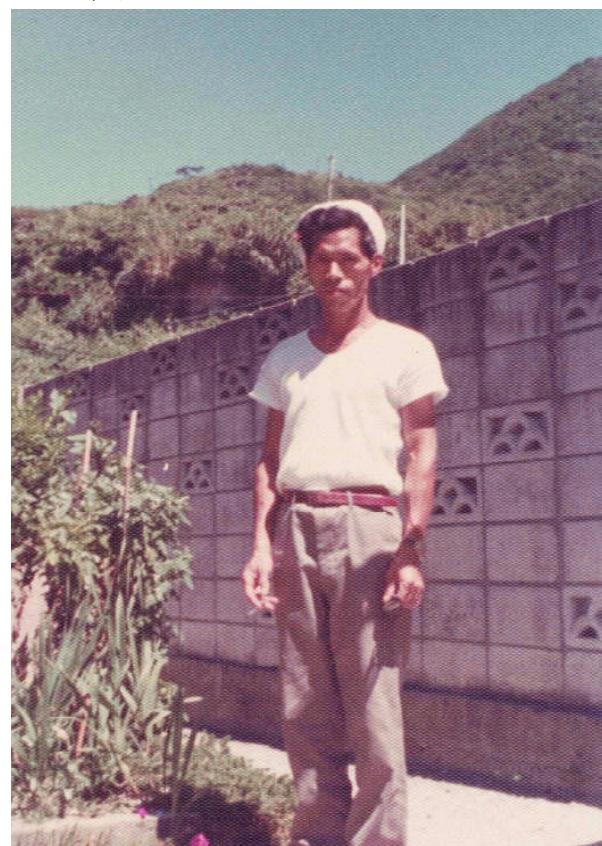
その話を聞いて事務を預かる富江も上京中なので、私も責任を感じて農協の仕事は人夫等に任せて、赤羽の店へ行つて帳簿を見て、全部の売り掛けの請求書を作り、倒産することは伏せておいて、店を

閉めて神津から撤退するということにして集金させました。

在庫もかなり有つたので、大工等を呼んで欲しい材料を安く売つてお金を集めました。

この時、真田屋さんは関庄商店を建てるので前金で資材を頼まっていましたが、材料をまだ半分しか納入していなくて、このまま店が潰れてしまえば関庄さんにも迷惑をかけるところでしたが、事なきを得ました。

その後に差し押さえが来ましたが、残つて いる物は倉庫と車と電話と帳簿だけでした。まだ何件か集金できなかつた所があつたので、



自宅の庭で

そういう所には差し押さえが行つたかもしません。

倉庫と車と電話は私が引き取ることにしました。倉庫に法外な売値をふつかけてきたので、怒つて「倉庫を解体したら基礎を壊して地主に更地さらちにして返さなきやあだが、自分らで解体して返せ！」と言ひ返しました。今度は妥当な値段を言つてきたので買い取り、峠の場所も更地にして地主に返しました。

当時、浜の売店の立て替えに材料の注文を頼まるることが多くて、私も忙しいので、ある程度の材料を仕込んで、神の川かめんかわの作左の隠居がまだ空き地だつたので、そこを借りて材料を置いて、真田屋の仕事が無くなり、富江が家にいたので、店番をさせていました。

当時は、夏になると浜の売店が前浜に五件程あり、多幸、沢尻、長浜、返す浜等各海岸にもあり、観光協会が管理していました。協会の会員がくじで二年間の権利を当てて営業するので、二年毎に建て替えていました。この年はちょうど立て替えの年でした。

松村の家を建てたとき、材料を仕込むのに真田屋さんと吉平の長女の嫁ぎ先の材木屋とで見積を取り、東京まで両方の店に買付に行き、取引の関係が出来ていたので、電話注文で品物を送つてもらい、大工をしながら、わずかながら材料も売りました。言つてみればこれが今の中一建材の始まりです。

材料の注文も増えてきて、真田屋さんの倉庫を買い取つたので、惣七と吉平の今の場所を借りて、そこへ建てて、本格的に



材木屋を始めたころ

材木屋を始めて今に至っています。

だいぶ前になりますが、喜代松おじさんが材木屋へ来て「にしゃあ、北海道の時のことを書いちやーりやーい」といましたが、私が書かずにいたら、又来て、「おいが書いたどうお」と言いました。（平成九年三月、第三集）

最近、滝一さんの長男の博可さんが「親父が元気なうちに北海道へ連れて行きたかったけん、一回も連れないうちに

逝つてしまつて、残念だあ・・・」と言つていたそうです。

北海道へ行つたメンバーは私以外は亡くなつてしまいました。まつたく、懐かしいです。筋の通らないことが大嫌いで、そんな時にはきちんとものを言つてきました。

今は材木屋を息子に譲りましたが、これからもまだまだ頑張ります。

平成二十四年一月  
(以上聞き書き)



# 神津の電話が開通した頃

大正十五年九月一日生 八十五歳

松江睦

『神津で電話ができるようになる』ということで、局長から「その補修要員として行け」との話がありました。私はその時『電電公社』に勤めていたわけでもなく、『金工』で生れて、昭和十五年に『尋常小学校』を卒業してから漁師をしていました。でも話はもう決まつていたらしく、言われるままに上京しました。

当時の東京は『都』ではなく、『東京市』でした。『支那事變（日中戦争）』は始まつていましたが、まだそんなに戦争がひどくない頃で、まだまだ通りを走る車はほとんど無く、時々見かけるぐらいのもの

でした。馬に荷車を牽かせる『馬力』が多く道路を通つていて、その道路は通る馬がそのまま糞を落として行くので、とても汚く、道路一面が糞で白くなつていて、とても不衛生でした。

どんな仕事かも全然分からぬまま、『電話線路』と聞かされていましたが、線路といえば電車の線路ぐらいしか知らないし、そんな程度で、実際行つてみてびっくりしました。『丸の内公務出張所』という所に行き、採用試験も何も無いまま、昭和十七年四月一日に即日採用という事で「明日から出て来い」と言われ、十七歳の春、丸の内にあつた『東京通信局』の『築地電話分局』という所に配属されました。

『あにいやるだろーなー?』と思ひながら翌日行つてみると、いきなり地下足袋と脚絆きやはん、ペンチと工具きしの輪つかのついたベルトを渡されました。そして「島の電話補修員として、お前はここで修業しろ」と言われ、二年ぐらい、昭和十九年の春頃までいました。



まだいる  
はずだつた  
が、時代は  
濃くなつて  
きて、二十  
歳で入隊検  
査をするは  
十八歳  
昭和十八年 正月

ずが、人間（兵隊）が足りなくなつたということで一年早まって、十九歳の時、八月に新島に行くことになりました。突撃等の訓練はありましたが、そんなに嫌な感じではなかつたです。戦争の状況が悪くなつていて、皆各隊に配属になつてから大砲の取扱いを一ヶ月ぐらいで訓練されて、すぐ配備されました。

私は内地の戦地に行くことは無く、新島での『連砲隊』に所属して終戦まで新島にいました。大砲の部隊だったので、新島の南部にある『丹後山』に配属になりました。丹後山の三方は『トーチカ（機銃などを備えたコンクリート造りの小型の防御陣地）』がたくさんありました。大砲の設置してある所を見廻つて歩くと、新島の南の浜の切り立つた絶壁の上にもトーチカが作つてあり、そこにも大砲が据えてありました。

この頃になると、神津の近海を潜水艦が出没するとの情報も入つてきいて、新島でも何回も機銃掃射きじゆうそうしゃに見舞われていました。戦争が九月～十月まで延びていたら、私達も新島も、陸は空爆で、海上は『ボカチン（潜水艦の魚雷）』でやられていました。

そんなある日、式根島に爆撃機が向かう時に、丹後山の私達の陣地から見下ろすと、その爆撃機が低空で下の方を飛んで行くのが見え

ました。私は大砲の標準を敵との距離に合わせる係で、銃器を下に見える機体に向けて撃てば、間違いなく百発百中で当たるという感じでした。班長が「やつちやーるかー、やつちやーるかー」と言って、打つか打たないか考えていましたが、結局『撃て！』という命令が出なかつたので撃ちませんでした。でも反対に打ち込んで撃墜していたら、今度は仕返しに新島の方が標的にされて、ひどい目にあつていたかも知れません。

新島で一番辛苦したのは水の無いことでした。神津みたいに『お観音』やら『長浜』やら『日向』やら、あちこちに水があるわけではありません。丹後山というのが、片道でだいたい神津でいう村から長浜あたりまでの距離がありました。

朝と晩に『背負い樽』を二つ担いで村まで降りて行き、村で水を汲んでまた山を上るのです。晩に水を汲みに行く時は、日中に精一杯あがいて（活動して）いて、その上食い物は少つとでの水運び行進

なので、目は開いていても神経は眠っているのか、ある晩は、先頭を歩いていた者が、曲がつて行くところを真っすぐに山の中に入つていつてしましました。そうすると後の人間もそのまま付いて行つてしまつて・・・しばらく歩いて途中で気が付いて「こ、こりやあ道が間違っているぞ！」と、それほどみんなが眠くて、そして疲れ切つっていました。

それと不思議に思つたのが、あんな山の中で、なんであんなに『蚤』が増えたのか、ということでした。とにかくすごい蚤でした。夏の時期だつたので、朝の整列をすると、半袖の縫い目にそつて、血をいっぱい吸つた蚤が、ずらつと並んでくつ付いていました。

そして時々『蚤取り！』という号令が掛かり、皆で一斉に蚤取り作業にかかりました。どうやるかというと、簡単です。血を吸われた主人は食べる物が少なくてガリガリに瘦せているのに、蚤は腹いっぱい血を吸つていて、飛べないのか尻をおつ立てた状態で止まつて

いて逃げません、それを捕まえて指でプチプチつぶします。指が血だらけになりました。そんな有り様です・・・。

またこつちとは逆に、北の『若郷』の方では『虱』<sup>しらみ</sup>がすぐかつたそうです。同じ新島の中で、北と南で、蚤と虱に悩まされていました。

日本中どこも同じ状況でしたが、戦時中は食い物が少なくて、しるい状態でした。食器自体も使えなくなつて、一升瓶の下をお椀程の高さで割り切り、口が傷つかないように淵<sup>ふち</sup>をヤスリで削つて汁物の器にし、茶碗は、夏場でご飯が傷まないよう『よしず』のような物で編んだ蓋<sup>ふた</sup>付きの籠<sup>かご</sup>で通気性のある『弁当行李』<sup>こうり</sup>が茶碗の代わりでした。肝心の中の飯は少しあしか入つていなくて、おかげはというと『メザシ』が一、二四、『香の物』として大根の葉っぱが切らないう状態で二本ぐらい、そんなものでした。

ところが、そんな窮乏<sup>きゅうぱう</sup>状態で過ごしてきたというのに、いざ戦争

が終わつてみたら、どこに隠してあつたのかと思うほどの大量の食糧が、前浜にずらーっと並べて置かれてありました。

アメリカの命令で銃器等は没収されました。銃器といつても鉄砲と連大砲が数本、速射砲等そんな程度でした。備蓄の食糧も出されて、置くところも無いので浜に並べたとのことです。食糧がこんなにもあつて、なんで喰わせなかつたんだ！と思いました。

食糧難で大変で、ちゃんとした物がいつ食えるか分からぬ状況だったのと、前浜に置かれたこの食糧を黙つて置いておくはずがありません、皆それそれで、かつぱらい（盜み）に行きました。ちゃんと見張りの留守番（新島の人）が居るのですが、新島の仲間が来たなと氣付くと、知らんふりをして、『持つて帰つちやーれ』とばかりに取らせてあげていました。

ところが神津の人だと知らない人達なので、なかなか難しかつたです。『見逃して黙つてーてーよ』と言うわけにもいかないので、怒

られて文句を言われても、「へい、へい」と低姿勢に頭を下げて持つてきました。

でも丹後山の備蓄食糧は何がどこにあるかよく知っていたので、そこから持ち出す時は、新島の人は何も文句は言いませんでした。米一俵を担いで、他に乾パンや乾燥野菜のネギ・ニ

ンジン・ゴボウなども持つて山を降りて、神津まで持つて帰り、家族も喜んてくれました。

除隊後はすぐ神津の郵便局に勤めました。当時は郵便局の中に電信・電話施設も入っていました。神津での通信の始まりは、私が生れる前の大正十四年に無線電信が下田ー神津間で開始され、それまでは郵便以外の通信手段はありませんでした。

旧役場の庭にあつた三十メートルの鉄塔から、会話ではなく、『モールス信号』でトン・ツー方式の無線でした。でもこれらの無線施設も軍によつて撤去されていました。

待望の『電話』が開設されたのは昭和十九年の三月のことです。この電話業務が始まるとということで、最初に書いたように私に話が来て、東京で二年間勉強し、そして戦争に取られたのでした。

この電話開通は、郵便局内にオモチャみたいな交換器(十二回線)が設置されて、加入者が十件、なんと島内間だけの通話でした。ちな



昭和二十三年頃の旧神津島郵便局

みに一番が郵便局、二番が『市十』、三番が農協、四番は他が嫌がるだろうということで役場が引き取り、五番が『武左』、六番が船の扱い所、七番が漁業組合、八番が大野忠一、九番が小学校、十番が診療所でした。

十回線を確保するのに、最初は「電話を付けちやつてえ」と頼みに歩きましたが、「島内だけで通じる電話をあにーするだ、いらないよ」とけつこう断わられました。電話番号を決める時は、五番、六番、七番、八番あたりは縁起を担いだりして、くじ引きで決めました。番号をとつ換えた所もあつたみたいです。

当時は島内だけ通じる電話だったので、なかなか回線も増えませんでしたが、昭和二十六年に伊豆一式根島一神津島の海底ケーブルが一回線だけ開通して、やつと内地と話せるようになりました。その海底ケーブルを引くのにも、式根と神津の間の海底がすごく悪くて、電柱のように突つ立つた山のような岩が何か所もあつて、通常の何

倍もの大回りをして神津につなげて来たことがあります。

最初は一回線だけだつたので、誰かが内地と通話していると、その人が終わらないと次の電話

ができないという状態でしたが、段々と回線数も増え、交換台も増やし、普通に市外通話がき始めると、昭和三十、四十年代にはどんどんと電話の申込みも増えていきました。



電電公社時代

いつへんには増やされないので、申し込んだ順番で繋げるのですが、皆待ちどおしくて「おらげーんがー（私の家は）いつ繋がるだ、えこひいきしてーるだな」、「おらげーんがー、あじ付けてくんないだ、あにか（裏で）やつてーるずら」「あにかやんなきやあだめだーか」と、けつこう文句を言われたりもしました。

当時の電話は『磁石式』という電話で、中にコイルで巻かれた磁石の棒が三本あってその磁力線の入り切りで電気をおこしてベルを鳴らすというものです。市外電話の掛け方は、電話器の横に付いているノブをぐるぐる回して交換手につなげて、相手先の電話番号を伝えて受話器を置き、交換手が相手先の電話とつなげてから、今度は逆に、掛けた方の電話のベルを鳴らして「つながりました、お話し下さい」と云われてやつと電話で話せる。というものでした。

でも、こうして電話が普及していくのを見てきて『電話が通つて、みんなが便利に使つて喜んでいて、本当に村のためになつているな

あ』と実感することができました。実際電話が家につながると、あるとないでは大違いでした。

私の子供の頃の話もしたいと思ひます。遊び場といふと、私達は『酒屋』の上の方にある『御殿山』によく行つて『陣取り』だとか『チャンバラ』をして遊んでいました。『大家』の土地なので、時々大家のじいさんが「こんなにやろーども！」と言つて騒ぎに（怒りに）来ましたが、子供達にとつては『何がそんなもん』というぐらいで、ほとぼりがさめると、また遊びに夢中になつていきました。



電話交換器と交換手

神社の広場の方も遊び場でしたが、御殿山ではよく木から木をつたつて、『利吉』の方の椿山まで競争していました。

昔は木もたくさん繁つていて、猿や忍者みたいに枝から枝へと渡つて、勝つた者は自慢したもんです。今の子供や親達には考えられないかも知れません。

そのおかげかどうか、東京で局に勤めて数日たつてから、先輩に「松江、あの電柱の上の物を取つてこい」と言われて、「はい」と言つてスルスルと上がって取つて来ると、「松江、お前田舎いなかで何をやつていた?」と聞いてきました。「漁師をやつていました」と答えると「へーツ、漁師の仕事で柱を上garことがあるのか」と言われたことがあります。(笑)

私は子供の頃から漁師が好きで、船に乗りたい、『トビ漁』に行きたいと思つていきました。『春トビ漁』というのが昔あつて、網を張つて、夜に飛魚とびうおが網に刺さるのを取るのですが、その漁に行きた

くて、ともかく恩馳おっぱしにも行つてみたいというのもありました。当時は『源八組』とかの『合ごう』という青年の集団組織があつて、そこにも入りたいと思つていましたが、まだ入る年齢ではなく、親も「生意気になるしかいダメだ」といつて許しませんでした。

尋常小学校というのは小学六年間と高等二年間の計八年間あつて、高等一年(今の中學一年生)の時でした、どうしてもトビ漁に行きたくて、家の者にも学校にも内緒でトビ漁に行く船に乗り込んで、『トモ(船尾)』の漁具等を入れる所の蓋ふたを開けて、知らんふりしてその中に隠れていました。そして船が沖に出てしまつたのを見計らつて、突然下から蓋を開けて出ると、「こんなにやろーどこに隠れてーただ」と、みんなおぼけた(驚いた)顔をしていました。「トビに行きたくて」と言うと、みんなが「オレツ、オレツ」とまた驚いた声を出していました。

その日は恩馳に着くとすごい嵐なぎでした。夕方、十杯ぱい以上いた船の若

い人達は皆「夜飯よもしを食うびやあ」と言つて、各々夕飯の仕度に取りかかつっていました。するとその仕度をしている間に、一転凄い風が吹いてきました。『疾風はや』とでもいうのでしょうか、風がそよそよとして、海もすぐ荒れきました。みんな驚いて「夕飯どころじやあない、早く逃げなきやあだ！」と言つて逃げはじめました。

その時『茂助』の『十二社丸』という船がいて、当時はバーナーで爆発させて走る『焼がまエンジン』で、なかなかエンジンがかからず、「あにーやつてえるだ、こんにやろー！」と親父が梶塚かじづか（梶の先）で機関場の上をぶつたたいて息子をさあいで（怒つて・どなつて）いました。それほど皆があわてる海の急変でした。

そしてみんな全速で戻りましたが、『もうり』の浜に波が向かつているので、『久作』の船が波に乗つてしまつて、浜にのし上げる寸前に、あわててひっくり返して沖へ出たりしていました。

昔の『ジナイカマ』で今のような堤防は無かつたので、戻つて来る春トビの船が全滅するんじやないかと、村中が大騒ぎになつていました。もうりの『山見』から港の方まで、人が集まつていて、そして波をかぶつているジナイカマにも、この大波の中を寄せ来る波の寄りを見て渡つたのか三、四人の人が居るのが見えました。

波の寄りを見て『入れ！』と合図をして港に入るのですが、その時に『重郎じゅうろう』の船が入りそこなつて、『山長やまちよう』の下あたりに波に乗つてつかし込んでしまいました。でも、すぐ大勢の人がサーッと出てきて、太いロープを掛けて、その大勢の人達で簡単に陸おがへ引き上げてしまいました。一級船の大きな船でしたが、船体もそんなに傷んではいなかつたそうです。

私はというと、私の乗つていた船は、その後に入るのですが、この時になつて初めて『こりやあ、ただごとじやーないだなー』と子供心に胸に迫つてきました。それまでは子供だつたせいもあって、事

の重大さが感じられず、『あにが、波がいつかきやあ、おもしろいや』ぐらいの感覚でした。

大人の方は、しら真剣で、前方の突きん棒台の下にいた私は「危ないしかいさがれ！」と言われて『艤（船尾）<sup>とも</sup>』の方にさがると、二人の大人、『久作』と『半作』のおやじが、船が波に乗ると、梶塚を漕いで波を下り、乗ると下り、を必死になつてやつていて、それを見ていて、『おいや、こりやあとんでもない時に乗つてまつたなあ、家に帰つ

たらぶち殺される騒ぎだなあ』と、やつと実感できました。実際家の者は、心配で生きた心地は無かつたと思います。無事帰りましたが、忍び込んで乗つた船で、こんなおつかない目に会つて散々な初乗りでした。

たつた二年の漁師生活でしたが、三回不思議な目に会いました。一回目は、今話したおつかない目に会つた事で、二回目は『アオガイ』を見ることができた、ということです。

もう『合』にも入つていて、『夏トビ』に行つて網を流して飛魚を捕つていたのですが、あまり捕れなくて様子をみていた時、船頭の『繁沢<sup>しげざわ</sup>』のおやじが「おれつ、あの長浜の白くなつてえるは、変だなあ、アオガイじやあないかなあ？」と言いました。みんなアオガイなんて知らないので、キヨトンとしていました。

『あにしてもまあ、行つてみれよ』と船を走らせると、『網を掛け『あにしてもまあ、行つてみれよ』と船を走らせると、『網を掛け



昭和十四年 水泳大会(式根島にて)

なあ、あんたどうなあ』と言いながら網を仕掛けて、引き揚げようとすると、重たくて重たくてなかなか揚がりません、そうしている内に、型のでかい飛魚が、網が揚がらないぐらいに掛かっていて、たつた一網で船は満船になりました。

船が飛魚の重さで前方に傾くので、網を後ろに置いてバランスをとつたほどです。「それ！『のぼり』だあ！」と、のぼり旗をたてて港に着くと、港がえらい騒ぎになりました。そしてトビ漁の権利は何隻もあつたので「明日つから順番組んで捕らなきやあ」ということになつて、五杯ぐらいの船が満船になるほど捕れました。

『アオガイ』というのは、大量の魚が卵を産むために浅瀬に寄つて来て、産卵と放精をした時に海が白く染まる状態のことだそうです。アオガイという呼び名も、見つけることがめつたに無いので、漁師歴の長い船頭しか知らず、若い者や中年の漁師でさえ、アオガイという名を知りませんでした。

三回目は、以前『新造』に『新栄丸』という船があつて、家の親父と友達で、一緒に『引き縄』に行くというので、私も一緒に行つた時のことです。なかなか掛からないので、夕方になつて「こりやあ、寂しいじやあ、そろそろ家へ行くびやあ」と言つて、多幸沖から前浜近くになつた頃、「ありやあ、アオガイじやあないろうかなあ？」と新造のおやじが言うので「あんにしても、まあ行つてみんびやあ」ということになつて向かいました。

すると海の中が『もうり』の浜のように白く見えていて、その場所に来たとたんに、四本流していた引き縄が四本とも凄い勢いで引いていきました。急いで揚げると、四本とも丸太棒のような『黒マグロ』でした。そして次には艦とから三メーターライぐらい流しだけで、マグロが喰うのが見えて、本当の『入れ食い』状態でした。

二メーター程でしたが、丸々と太つたマグロでした。船の上ではみんな夢中で、時間でいえば、わずかな時間でしたが、いつのまにか

暗くなっていました。船の前方の網を入れるでかい柾<sup>ます</sup>に入れたのですが、そこがいっぱいになつて、船が前方に突つ込みそうなので、他の柾の栓を抜いて海水を入れて安定させて、「のぼりを立つちやあれよ！」ということで意気揚々と港に向かいました。港ではやはりみんな驚いていました。アオガイだったのか、群れに当たつたのか、漁師の時のいい思い出です。



平成二十四年一月 自宅にて

戦争も体験し、漁師、電話局勤務と色々経験してきましたが、電話<sup>たずさ</sup>という当時の新しい文化が神津に初めて入つてくる時に、それに携わられたことを嬉しく思っています。

（以上聞き書き）

\* 昨年3月「お年より作文集」第十七集を皆様にお届けした後、しばらくして河合よし子さんが社協にいらして「お年より作文集を読んで色々思い出し、懐かしくて、また書いてみました、感想文です」と原稿をお持ちになり、それを預かりました。その後、六月の末にご本人は急逝され、ご家族に原稿を預かっている事をお伝えしたところ「本人が望んでいたのなら、もし紙面に余裕があるようでしたら載せてください」とのご返事を頂きましたので、掲載させていただきます。

## 激動の昭和に生を受け

昭和三年五月五日生（享年八三歳）

河合よし子

昨年の「お年より作文集」第十七集に魅せられて、又乱筆を走らせる事にしました。

石野田道春さんは、私の一級下でした。とても利発な生徒でした。石野田さんの寄稿された記事を読ませていただき感銘、あの魔の日、三月十四日、恩馳の空爆。あの日私は役場にてお世話になつておりました。

私の父も空爆にあつた仲間です。空爆の知らせを受け、救急箱を肩に掛け一目散に防波堤へ走りました。途中まで行きましたら、神津館（文吉）の父と、大久保（こびきや）の父が背負られて青い顔を・・その姿を見た瞬間父を思い出し、思わず空を見上げ、お天とう様、私の命を縮めても父が元気な姿で帰りますように、と祈りながら走りました。

恩馳での犠牲者は、浜川幸男（幸内）兄と、梅田元治（万五）兄の二人でした、元治兄は私の一級上でした。私の父達は幸い無事に帰るこ

とができました。

父達は若い衆の揚げる網を受取る役で、岩の上だつたそうです。そしたら向うから爆音が聞こえ、機体が見えたと思つたら、もう父達の頭の上だつたそうです。やがてバリバリと海へ機体からの投下が始まつて、父は甥の池田元吉と岩の上をぐるぐると夢中で走つたそうです。とにかく飛行機は、海へ機銃掃射雨あられの如く、そのような事なので海に入つていた若い命が奪われたのです。父達は岩の上で、あの牡蠣の上を素足のまま足袋もはかず駆け巡つたと云いました。やがて空爆も終わり、ふと海を見ましたら、海は血の池の如く。幸内の兄とは同じ網組なので、父も心配して海を見ましたら、どうでしよう、岩の下にて（海の中）幸兄が今にも海中へ頭を入れる寸前、海は血の海、父が「幸、しつかりしれよ！大丈夫だ、船はあるよ、連れて行くからしつかりしろ！」と大きな声で、そしたら「おやじ、おいやあだめだあー」と言つて目をつぶつたそうです。

今のようにエンジンを焚いて港の出入りする時ならいざ知らず、昔は小舟にて櫓を漕いでの出入り、どんなにか切なく辛い日々だつた事かと、昔の人の我慢強さ、今の人達は我慢つて云う事がどうでしようか？・・。

梅田武男さんの手記ですが、武男さんとは同級生です。今迄の寄稿文集にありますように何と記憶の良い人か。「新人」との話も書いてくれてあり、亡き友、恒代さんを思い出し涙を流しました。恒代さんも同級生で、毎日のように、新人の隠居がありまして、そこで勉強して帰つたものでした。武男さんの作文にも書いてありますように、恒代さんの母は志げさんといい、細身の優しい母でした。私達の育つ頃の貧困の生活がよくわかります。どんなに勉強が好きで上の学校へ行きたくても願いは叶わず、悲しい時代でした。

昭和十六年に戦争が始まりました。その発端は？・・・日本軍の真珠湾の攻撃が始まりました。その発端は？・・・日本軍の真

私は役場にお世話になつており、毎日毎日、入営兵・出征兵を見送るのが日課でした。石野田さんの書にも「鬼畜米英」とか「欲しがりません勝つまでは」が合言葉。始まつた頃は日本軍が優勢で、あの当時の米国の大統領は「ルーズベルト」氏、英國は「チャーチル」氏でした。「ルーズベルトのベルトがゆるみ、チャーチル、チル花が散る」と、あの大国をなどり、結果はどうだつたでしょう。本土決戦、沖縄決戦が戦場となり涙なしには聞かれぬはめに。「ひめゆり部隊」とか防空壕の惨劇さんげき、高い丘の上から次々と子供を海へ投げ入れ、乳児はおんぶして投身する心情、戦争は二度としないよう全国民が願う事でしょう。戦争とは人と人の殺し合い。

戦争も終わり、米軍より援助物資として神津へも贈られて来た「オートミール」。その品を前号で記したように、松村商店の蔵へ預けまして、役場より毎日、蔵のカギを持ち通いました。毎日、松村商店の母が私の行くのを待つておりました。武男さんの手記を読み、

懐かしく涙がとめどなく、武男さん、残る人生を悔いなく頑張ろうね。

新エ門の出身のつる子姉の手記を読み、感じ、思い出しました。弟の啓吉さんは同級生です。妹の葉子さんとも芸能保存会のメンバーで仲良く、頑張った思い出の数々。道で会いますと、「又（彦左宅）へ集まろうよ」と笑い話です。催し物がある度によく彦左宅へ集まり練習したものでした。つる子姉の思い出はもう一つ、白崎利子姉と二人で学芸会に（月の砂漠）を踊つたのを忘れません。

空襲の記事も読み、河原村もひどかつたです。文造の祖父と善次の照兄です。爆風にて亡くなつたのです。私は役場に居りましたので、照兄は私の一級上でした。

下駄屋の喜曾子姉の記事ですが、思い出す事がいっぱいあります。運送業といいましょうか、ほんとに男の人以上に働いてがんばつた一生を送つた人と思います。村のため、ほんとに御苦勞様でした。

よく私の姉が下駄屋の前田先生がとか、治工門の石田先生がと話した事を思い出しました。

バター造りの記事も書いてありましたが、私もよくバケツへ乳を入れて下の沢から須賀原の「三宅」まで運びました。私の家でも牛を飼育していました。祖父の代です。毎朝の日課でした。

牛も人間と同じで子牛を身籠みごもると、お腹に十月十日といつて長い間かかりました。ほんとに牛って人の話が分かるのでした。やがて家を離れる日など、「今日は舟に乗つて行くだあ、気を付けてなー」と祖父が云うと、目からポロポロ涙が落ちるのです。あの寺山の坂を登つて行くのを何回見送つたことか。母の云つた言葉が思い出され・・・「よしいー、牛を飼つている家へ嫁にいくなああ、雨の日も風の吹く日、雪の降る日、休みなくカヤを刈らなきやあなんないしかい」あの母の言葉を思い出し、十九歳の年、日曜日の朝は雪が降りました。磯渡りをして、草鞋わらじに白足袋しろたびと、あの名組の「ヤダテ

ラ」という山へカヤを刈りに行き、「歳の数だけさげえー」と十九束頭へ乗せ帰った日が、昨日のように思い出され、熱い涙をこぼしました。

河合よし子さんのご冥福をお祈りいたします。

神津島社協職員一同

## あとがき

「お年寄り作文集」の第十八集ができ上りましたので、皆様のお手元にお届けいたします。

今回、最年長の松江睦さんの作文にあつたように、当時電話を掛けるのは、交換手が相手の電話につなげてから、逆にこちらの方の電話のベルを鳴らして「お話し下さい」と言つてから通話ができました。子供の頃、電話のベルが鳴つたので、受話器を取ると、交換手さんの声の後、東京の親戚の声で「もしもし」と言うので、「もしもし、何ですか」と言うと、「そっちから電話を掛けてきたんでしょ、お母さんに代わつて」と言われたことがあります。

電話ひとつ掛けるのにも時間や手間がかかつてましたが、何かその分、時間が経つのがゆっくりしていて、逆に現代は携帯電話のように時間も手間も省けるようになりましたが、何故か時の経つのが早くなつたような気もします。今回、寄稿及び、聞き書きにご協力下さつた方々に、厚く御礼申し上げます。

平成二十四年三月

神津島村社会福祉協議会

お年寄り作文集 第18集  
発行 平成24年3月  
神津島村社会福祉協議会  
TEL 04992-8-0819